



『<sup>♪</sup>プレミアパンツ』

ソウグウ

---

午前三時。夜の新宿は人を綺麗に見せる。賑わいを増した店の明かりが、間接照明になって、細かいところは気にしなくなる。

“ガチャッ”

店のドアをロックして、階段を降りる。店を開けていても仕方が無い。アタシが自分の店を持って一年弱。初めこそ繁盛したものの、今では馴染みの客も少しずつ足が遠のき、店員の数も減る一方だった。タクシーを拾うために大通りに向かう。細い路地には色々な物が転がっている。ゴミ、人、この街に落ちているものには極力触れないのが常識。面倒は金を失う元だ。

「お願い！」

「えっ…」

ショートカットの女がいきなりアタシの腕にしがみ付いてきた。

「助けて！追われてるの！」

見ると、遠くの方から走ってくる集団が見えた。…あの感じは多分ヤクザ。

「ちょっと離してよ。面倒はご免だわ。」

女の手を振りほどこうとしたが、離れない。ヤクザ達はどんどん近付いて来ている。

「お願い！私…」

女が往来でばとワンピースを捲り上げた。

「妊娠してるの！」

確かに腹がパンパンに張っていて、経験が無くても臨月だということが一目で分かる。

「ちょ…ちょっと、スカート下ろしなさいよ！」

「助けて！」

「わ、分かったわよ！とりあえず戻して！」

女はワンピースを元に戻し、近付くヤクザとアタシを交互に見た。アタシも全く同じ行動を取ってから、この迷惑な妊婦を抱き上げた。

「逃げるわよ！しっかり擋まって！」

「え！？ちょっと！大丈夫なの！？」

今度は女の方が混乱している。

「大丈夫。アタシ、まだ男だから！」

ブランド物のピンヒールを捨てて、妊婦を抱えた私は走り出した。

## トウボウシャ

---

縦横無尽に路地を駆け抜け、目立つ通りの店の影に潜んで、奴らが通り過ぎるのを待った。どうやら巻けたようだ。

「はあ、じゃ、気をつけて帰ってね。」

「待って！行くトコ無いの。」

「は？」

「匿ってくれない？」

「アンタ、どこまで図々しいのよ！」

「旅は道ずれ世は情けって言うじゃない。」

「旅じゃないし、情けは人の為ならずよ！」

「お願い。お金ならあるし、今日だけでいいから…。」

懇願する女のふわっとした黒いワンピースの下には、アタシが絶対に手に入れられないものが入っている。体が男に生まれてしまったせいで、小さい頃からずっと渴望していたものだ。この女がちゃんと産んで育てるつもりなら、今アタシが助けなければいけないような気がした。

「…分かった。近くにウチの店があるから、そこに行きましょ。」

「マジありがと！」

「一日だけよ。」

無条件に喜んでいる女を連れて店に戻った。店に入るなり、きよろきよろと店内を見回している。

「何よ。オカマバーがそんな珍しい？」

「うん。初めて。オカマも。あんた名前なんて言うの？」

「マヤよ。アンタは？」

「さつき。藤本さつき。」

…ん？聞いた事がある気がする。

「本名よ。」

「もしかして、六本木でストリッパーやってなかつた？」

「…。」

「いや、いーの。名前が似てたから。聞いてみただけ。妊婦なはずないわよね、あのさつきが…」

「その、さつきよ。」

「え？」

「だから、今言った、六本木のさつきは、私の事。多分ね。」

「ホントに！？」

「うん。半年くらい前に引退したけど。」

それならやっぱりアノさつきだ。この業界で彼女の名を知らない者はいない。彗星のごとくやってきて、頂点まで一気に駆け上り、いきなり謎の引退をした彼女の話は、半年経った今でも話題に上る。その上、一週間前の新聞の見出しを思い出した。藤本さつきのいたクラブのオーナーが殺害され、現金は消えていた。警察は重要参考人として、確か藤本さつきの捜査をしている。そして、今分かったのは、ヤクザにも追われているということだ。

# ホゴ

---

「オーナー殺したの、もしかして…」

「違うって！死体は見たけど速攻逃げた。」

「どうして警察に行かないのよ！？」

「刑事は…あんまり好きじゃないの！」

「やっぱり、アンタ、やったんでしょ？」

アタシは携帯を取り出して、通報しようとした。

「やってないわよ！」

さつきが携帯を取り上げる。女にしてはすごい力だ。

「痛いわね！アンタ、アタシが助けなくとも大丈夫だったんじゃないの？」

「普段ならぬ。でも、この腹が邪魔で、いつもの動きが出来なくなってるのよ。バランス取り辛いの。」

「バランス…っていうか、アンタ、妊婦の癖になんで5センチヒールのブーツなんか履いてんのよ。」

「背が低いから。」

「はあ？」

「私、155センチしかないの。背が低いと舐められるじゃん。これでも低くした方。」

「転んだりしたらどうすんのよ！？」

「大丈夫だって。ピンヒールじゃないし、転んだりしないわよ。私は最高のダンサーよ？バランス感覚も運動神経も最高だし、私が投げたパンツにはプレミアが付くんだから。第一、転んだくらいじゃ私の子供なら死にやしないわ。」

「馬鹿じゃないの！？アンタ、ちゃんと産む気あんの！？」

「あるわよ！だから、こんなに腹が突き出るまで頑張ってんじやん。」

「父親は？」

「誰の？」

「その子供のよ。」

「いるけど…いない。…そんなもんいなくたって大丈夫よ。男は子育てなんかしないでしょ。」

それはそうだとアタシも思う。アタシの父親は幼い頃に出て行った。それからずっと貧乏で苦しい生活を強いられてきた。子育ては別にしても、父親がいたら金銭的にぎりぎりの生活はしなくてもいい。

「父親がいないって、どれだけ大変か分かる？」

「さーね。ほっといても子供は育つわよ。」

人事のような態度にむかついた。

「父親が出てって、アタシと母さんは必死で生きてきたのよ！ほとんどいつも同じ服で、家事を手伝うので勉強なんか出来なかった。高校も行けずに働いて、結局あの人は、母さんは疲れ果てて死んだの。保険がないから病院にも行けずね！アンタみたいに自分勝手でぽんぽん子供産む女見ると、ほんと腹立つわ！」

アタシが言い終わると同時に、さつきがキツイ眼差しで歩み寄ってきた。

「煩いわね！私は捨て子だった。父親どころか親なんて知らない。でもそれで良かったと思ってる。じゃなきや、ストリッパーになんてきっとなれなかつた。好きな仕事と好きな生き方をしてるの。マヤがどれだけ苦労したかなんて知らないし、違う性別に生まれたことがどれだけ辛いかも分からない。でも、だからって、世界中の不幸を一身に背負つたみたいな事言わないでよね！」

言葉が出なかつた。

「親がいたって、辛い思いをしてる奴は大勢居る。辛いと思わず生きる方法は、自分で切り開くもんでしょ？マヤは今の方が、辛いと思ってる？」

「…思って…ない…。」

「…ゴメン。助けてもらったのに、言い過ぎた！！マジゴメン！」

そういうとさつきが抱きついてきた。女に抱きつかれるのは慣れてないし、女を好きになる趣味も無いが、守ってやりたい気持ちになった。ストレートの男の気持ちが、なんとなく分かった気がした。

# シンソウ

---

「もう、いいわよ。乗りかかった船だし。その代わり何でこんなことになったのかとか、ちゃんと聞かせてよ？」  
「……ふう。分かった。じゃあ……。どっから話したらいい？」  
「そうねえ…。あ、この子の父親、まさかあのオーナーってわけじゃないわよね？」  
「違う違う！この子は…子のこの父親は…刑事なのよ。」  
「は？……ええ！？じゃあ尚更死体発見した時点で、話せばよかつたじゃない！」  
「だって、子供有無って言ったら結婚しようって言われて。それで逃げてたから……。」  
「逃げる意味がわかんない！結婚しようなんて、当たり前だし、いい奴じゃない。何で素直に結婚しないのよ！子供産みたいくらいなんだから、好きなんですよ？」  
「好きだから、夫婦ってモノを知らない私が結婚なんて、自信がないの。で、あの人に見つからないように、姿消したけど、しつこい暗いくらい探してて……。その上こんな事件まで起こっちゃって。だから、警察からも逃げてんの。」  
「……。アタシが言うのもなんだけど、誰も自信があつて結婚してるわけじゃないと思うわよ？」  
考えることは分からぬじやない。アタシなんか、女ですらないんだし。  
「それにね、そんだけ公私混同までして探すなら、よっぽどあんたを好きなのよ。……ま、今はアンタ、重要参考人になってるから、混同じやないと思うけど。で？ヤクザの方は何なの？」  
「多分、オーナーの部下。」  
「殺したと思われてるの！？」  
「うーん……って言うより、金、盗んだと思われてる……みたい？」  
「……。みたい……じやないんじやないの？」  
「……えへへ。」  
「はあ！？えへへじやないわよ！今すぐ返しなさい！」  
「いやよ！！引退する直前までの3ヶ月、給料もらってなかつたんだから！」  
「それとコレとは別でしょ！？第一金額が違うんじやないの！？」  
「大丈夫よ！安全なとこに隠したし、片が付いたらマヤにも今日のお礼渡すから。」  
「ホントに？……って、いや、でも！」  
「欲しいでしょ？」  
「そりやあ、ねあ……。」  
「マヤの夢ってさ、何？」  
「何って……。」  
「それに必要なんじやないの？」  
このコ、分かっていて聞いている。  
「身体も女になって、女として働くこと！こんなバージャなくてね。アンタ、分かってて聞いてるでしょ？」  
「ふふん。心が女なら、同じ女の考えることくらいわかるつしょ。」  
嬉しい事、言うじやない。他の女に言われるより、さつきに女と言われることが遙かに嬉しかった。  
「アンタは？アンタはどうするの？」  
アタシもわかつて聞いていた。  
「あの金で、子供産んで、育てる。」  
「ひとりで？」  
「……。あんな別れかたして……怖いのよ。今更どうしたって許してくれないわ。」  
「大丈夫よ。聞く限りじや、許すも何も、アンタごと子供のことも心配してるわよ？アンタが今臨月な上に、重要参考人になってるし、多分、今はヤクザに追われてるって事も知ってるはずよ。」  
「……電話、してみようかな……。」  
その時だった。激しくドアを揺らす音が聞こえ、罵声と共にさつきを呼ぶ声が聞こえた。どうやらヤクザの一人のようだ。



# タイホ

---

「うそでしょ！？どうしてバレたの！？」

「付けられてたのか、マヤの顔から割れたのか・・・。」

「兎に角隠れて！絶対何とかするから！」

「ありがとう！」

さつきがまたぎゅっとアタシを抱きしめ、素早く部屋の奥に消えた。

「はいはい、今開けるわ。いらっしゃ・・・」

「あのアマ、いるんだろ！？早く出せ！」

「残念だけど、ここに女は来ないわよ。分かってて來てるんでしょ？さ、何飲む？」

「ふざけんな！おっさんが！！」

「ひっどーい！ア・タ・シ・は、オ・ン・ナ・よ。」

男に擦り寄ってみた。汗とキツイ香水の酷いにおいがした。アタシの好みじゃないことだけは確か。

「離せ！気持ち悪い！」

「ちょっと！痛いわね！」

突き飛ばされてソファに倒れこんだアタシは、さつきの隠れている奥の部屋に進む男の姿を見て、飛び掛った。

「ぎやつ」

こんなところで、まだ女になっていなくて良かったと思うなんて。

暫し格闘が続いたが、向こうが弱いのかアタシが強いのか、あたしが優位に立っていた。もう少しで決着が付こうというところで、不意をつかれ、男がナイフを取り出した。

「ぶっ殺してやる！」

ナイフを振り回す男を前に、私は防戦一方になった。と、同時にパトカーのサイレンが近付いてくるのが聞こえた。どういうこと？タイミングが良すぎる。

「止めな！警察もうそこまで來てる！」

部屋の奥から、携帯を片手にしたさつきが出てきた。息が荒く、ドアに寄りかかっている。

「くっそ」

どうすべきか迷っている男が逃げ出そうとした瞬間に、警察が店に入ってきた。

「警察だ！銃刀法違反！傷害容疑！犯人確保！」

男はあっという間に抑えられ、店の外へと連れ出された。と、バタンと奥の部屋のドアが急に開いた。

「さつき・・・！」

「破水した・・・。」

「ちょっと！誰か救急車！妊婦がいるの！」

あたしが叫ぶと同時に、一人の私服警官が駆け寄ってきた。

「さつき！どうして逃げたりした！？俺はお前が・・・。」

その様子を見て、直ぐにその刑事が件の刑事だと分かった。

「今はそんなこといいから！ほら、はやく病院へ！」

「ああ！俺の車で行く！」

刑事がさつきを抱きかかえ、外に連れ出す。車に乗る寸前、さつきがアタシに下着を投げて言った。

「プレミア！私の投げたパンツにはプレミアが付くって言ったでしょ！全部あげる！」

ぽかんとしている私を置いて、車はサイレンを鳴らしながら遠ざかっていった。

## ラスト

---

数時間の事情聴取中、さつきが無事に女の子を産んだ事が知らされた。心から喜ぶと共に、あの金のことは黙っておいた。後はさつきが自分で何とかするだろう。

警察から出てみると、すっかり昼になっていた。色々思い出すと不思議と笑みがこぼれる。

「あ、そういえば。」

ブラに突っ込んでいたさつきの下着を取り出した。

「プレミアって・・・。全くあのコ・・・ん？」

下着のまたの部分にコインロッカーの鍵が縫いこまれていた。